【事後調査の結果】

調査項目：環境保全のための措置の実施状況（水文環境、植物・動物、その他の項目）

1　調査地域

計画地内とした（図 7-1(1)～(2)参照）。

2　調査手法

(1)　調査時点

平成 30 年度及び令和元年度の B～F 工区の工事を実施している時点とした。

(2)　調査方法

現地踏査及び関連資料の整理により行った。

3　調査結果

環境保全のための措置の実施状況は、表 7-1～表 7-3 に示すとおりである。

平成 30 年度及び令和元年度の工事における水文環境、植物・動物、その他の項目（温室効果ガス等）に関する苦情はなかった。

図 7-1(1)　調査地域(平成 30 年度)

図 7-1(2)　調査地域(令和元年度)

表 7-1　水文環境の環境保全のための措置の実施状況

評価書記載事項	実施状況
防災工 ・仮設防災工として、計画区域からの排水量の調整を図り、土砂の流出を防ぐために、あらかじめ計画区域境界部分や雨水排水放流部分に仮設の防災施設等を設置する。	・切盛土工事着手前に計画区域境界部分や雨水排水放流部分に合計3ヶ所の仮設調整池と、2箇所の本設の調整池を設置し、計画区域からの排水量の調整を図り、降雨時の計画区域下流の三沢川の流量増大を抑制した。(図7-2(p.152)及び別紙4　水質汚濁の項　写真4-3(1)～(8)(p.101～104)及び写真4-4(1)～(4)(p.105～p.106)参照)。

表 7-2(1)　植物・動物の環境保全のための措置の実施状況(植物)

評価書記載事項	実施状況
・奥畑谷戸上部の尾根に囲まれた、まとまった地域を残留緑地として保全することにより、残留緑地の環境の変化を最小限とし、谷戸内に生育する植物全体を保全する。	・奥畑谷戸公園の尾根に囲まれた箇所（p.143及びp.144に示す残留緑地）を、現状のまま保全し、残留緑地の環境の変化を最小限とし、谷戸内に生育する植物全体を保全している。
・注目される種のうち、計画区域内から消滅するものに対しては、移植を行うことにより種レベルでの多様性を維持する。移植を行う種は、タマノカンアオイ、エビネ、センブリ、ヤマミゾイチゴツナギ、ドウリョウイノデ、ヒトリシズカ、キカラスウリ、ワニグチソウ、ヒゲシバ、オニノヤガラ、フモトシケシダ、ウマノスズクサ、ホドイモ、ギンラン等とする。有毒であるドクウツギについては、計画区域内は人の生活する場となることから移植は行わない。	・平成30年度及び令和元年度の造成工事箇所で、改変前の注目される種の確認調査を実施した。その結果、注目される種は無かったことからから移植は実施していない。平成27年度までに行った移植の状況は、表7－2(3)に示すとおりである。

表 7-2(2)　植物・動物の環境保全のための措置の実施状況(植物)

評価書記載事項	実施状況
・移植を行った種については、モニタリング調査等の定期的な観察を行い、必要に応じて管理を実施するものとする。	・平成27年度までに移植を行ったタマノカンアオイ、エビネ、センブリ、ヒゲシバ、ウマノスズクサ、ホドイモ、トウゴクシダ、オカタツナミソウ、ササバギンラン、ホソバナライシダ、オシダ、ウラジロ、アスカイノデ、サイハイラン、キンランについてモニタリング調査を行った(写真7-1(1)～(8)参照)。移植個体が概ね良好に活着している状況を確認するとともに、除草等の管理を実施した。センブリについては、平成19年度に奥畑谷戸公園に整備した圃場に播種したが、現在まで確認されていない。ヒゲシバについては、平成19年度に奥畑谷戸公園の果樹園付近に整備した圃場に表土ごと移植をした。平成24年度までは確認されたが、その後確認されていない。センブリ、ヒゲシバについては、平成30年度及び令和元年度に、発芽及び生育を促進するため、圃場内の伐採、除草、踏圧を加える等の管理を実施した（写真7-2(1)～(2)参照)。オシダについては、平成24年度に、奥畑谷戸公園に1個体を移植した。平成29年度までは確認されたが、平成30年度及び令和元年度で生育を確認できなかった。今後も確認調査を実施する。
・残留緑地の林縁が切土区域に面している部分については、低木やツル植物を植えるなどマント植物を植栽し、樹林内の湿度や日射条件の変化を抑えることにより、群落レベルでの多様性を確保する。(対策時期：防災工の施行中)	・残留緑地の林縁部の切土区域に面している部分は、切り株から萌芽したアラカシ、コナラ、主に陽地を好む低木のヌルデ、アカメガシワ、ヒメコウゾ、ニガイチゴが密生しており、その高さは約3.5～5mほどになっていた。クズ、ミツバアケビ等のツル植物もみられ、マント群落を形成しつつある状況であったことから、低木やツル植物を植えるなどマント植物の植栽は実施していない(写真7-3(1)～(2)参照)

注)評価書記載事項については「事業計画の変更について」(平成 24 年 6 月)の内容である。

表 7-2(3)　注目される種の移植状況

種　　名	個体数	移殖状況
タマノカンアオイ	12	平成 23 年度移植(11 個体) 平成 25 年度移植(1 個体)
エビネ	8	平成 23 年度移植
センブリ	播種	平成 19 年度移植
ヤマミゾイチゴツナギ	-	今後移植予定
ドウリョウイノデ	-	工事着手前の調査で未確認
ヒトリシズカ	-	工事着手前の調査で未確認
キカラスウリ	-	平成 24 年度に確認（非改変地）
ワニグチソウ	-	今後移植予定
ヒゲシバ	表土移植	平成 19 年度移植
オニノヤガラ	-	工事着手前の調査で未確認
フモトシケシダ	-	工事着手前の調査で未確認
ウマノスズクサ	3	平成 23 年度移植
ホドイモ	1	平成 26 年度移植
ギンラン	-	工事着手前の調査で未確認
トウゴクシダ※	5	平成 26 年度移植(2 個体) 平成 26 年度移植(アカマツ搬出に伴う移植:3 個体)
オカタツナミソウ※	51	平成 23 年度移植(33 個体) 平成 24 年度移植(11 個体) 平成 26 年度移植(7 個体))
ササバギンラン※	7	平成 23 年度移植(6 個体) 平成 26 年度移植(1 個体)
ホソバナライシダ※	4	平成 23 年度移植(1 個体) 平成 24 年度移植(1 個体) 平成 26 年度移植（アカマツ搬出に伴う移植:2 個体)
オシダ※	1	平成 24 年度移植
ウラジロ※	30	平成 23 年度移植(27 個体) 平成 24 年度移植(2 個体) 平成 25 年度移植 1 個体)
アスカイノデ※	128	平成 26 年度移植(アカマツ搬出に伴う移植:81 個体) 平成 27 年度移植(47 個体)
サイハイラン※	15	平成 23 年度移植(6 個体) 平成 26 年度移植(アカマツ搬出に伴う移植:9 個体)
キンラン※	4	平成 26 年度移植

注)※印の注目される種については、「事業計画の変更について」(平成 24 年 6 月)で移植対象種として記載していなかったが、造成工事着手前の調査において、造成工事区域内及びその周辺で生育を確認したことから移植を行った。これらの種の選定基準は、表 7-2(4)に示すとおりである。

表 7-2(4)　新たに移植対象とした注目される種の選定基準

選定基準 / 確認種	第 4 次レッドリストの公表について（平成 24 年 8 月 28 日、環境省　報道発表資料)	東京都の保護上重要な野生生物種（本土部）2010 年版	「稲城市史　資料編 1 自然」（平成 6 年　稲城市）において注目すべき植物として取り上げている種
トウゴクシダ		NT	
オカタツナミソウ		VU	
ササバギンラン		NT	
ホソバナライシダ		VU	○
オシダ			○
ウラジロ		VU	
アスカイノデ		VU	
サイハイラン			○
キンラン	VU	VU	

注)VU(絶滅危惧Ⅱ類)：絶滅の危険が増大している種
NT(準絶滅危惧)：現時点での絶滅危険度は小さいが、生息条件の変化によっては「絶滅危惧」に移行する可能性のある種

表 7-2(5)　植物・動物の環境保全のための措置の実施状況(ほ乳類（動物全体））

評価書記載事項	実施状況
・奥畑谷戸の残留緑地部分は現状のまま保全するとともに、全体の工事工程を検討することにより、各工区の工事開始時期をできるだけずらし、また、工区内では徐々に造成を行い、動物に与える影響を緩和するよう配慮する。さらに、注目すべき動物種等については、人為的に移動させることにより、種レベルでの多様性を維持する。	・奥畑谷戸公園の残留緑地部分は現状のまま保全している。工事は施工計画に基づきA工区から順に造成工事を実施し、工区内では徐々に造成を行い動物に与える影響を緩和するよう配慮した。さらに、根方谷戸川で確認されたトウキョウサンショウウオについては、変態直前あるいは変態後の幼生を奥畑谷戸公園樹林内仮設池（平成19年度設置）へ移植し、種レベルでの多様性の維持に努めている。なお、トウキョウサンショウウオの移植は平成19年度より平成25年度まで毎年実施した。その後は仮設池の維持管理を実施しており、平成30年度及び令和元年度も仮設池で順調に成育していることを確認した。
・詳細工程を検討することにより、樹林の伐採をできるだけ後に行うことにより動物に与える影響を緩和する。	・平成30年度から令和元年度は主にB、C、D、E、F工区で工事を実施した。工区内の造成工事は段階的に実施し、樹林の伐採も工事の進捗に合わせて、徐々に伐採を行うことにより動物に与える影響を極力緩和した。

注)評価書記載事項については「事業計画の変更について」(平成 24 年 6 月)の内容である。

表 7-2(6)　植物・動物の環境保全のための措置の実施状況(鳥類)

評価書記載事項	実施状況
・事業の実施によるオオタカへの影響を最大限減少させるため、平成 14 年から事業が完了するまでモニタリング調査を行い、計画区域内における営巣期の活動状況をより詳細に把握する。その際、計画区域内もしくは近接する地域において営巣にかかわる行動が確認された場合、専門家の意見を聞き、調査結果に対応した措置を検討する。また、平成 14 年の調査についてはその結果がまとまり次第、調査結果に対応した措置を検討する。	・平成14年より継続してオオタカのモニタリング調査を実施している。 平成14年度から令和元年度の間は事業区域外での繁殖を確認した。平成30年度及び令和元年度は事業区域内の営巣林について、生息環境を維持するため、営巣林内の状況をモニタリングすると共に立入制限ロープの補修を行った(写真7-4(1)～(2)参照)。なお、保全対策の実施にあたっては、平成29年度及び平成30年度のオオタカモニタリング調査結果及び平成30年度及び令和元年度のオオタカモニタリング計画を専門家に説明し、今後の保全対策についてご指導、助言をいただいたうえで実施した。
・前年にオオタカが営巣した箇所から約 350m の範囲において、2 月～4 月にかけての建設機械による工事を中断する。なお、工事区域内もしくはその近接する地域において営巣が確認された場合は、専門家に意見を聞くなどし、オオタカの営巣地から 350m の範囲において、8 月までの工事を中断する。	・オオタカの営巣が確認された箇所から約350mの範囲内にC工区の工事箇所が含まれていることから、C工区での造成工事を2月から8月にかけて中断した。なお、保全対策の実施にあたっては、平成29年度及び平成30年度のオオタカモニタリング調査結果及び平成30年度及び令和元年度のオオタカモニタリング計画を専門家に説明し、今後の保全対策についてご指導、助言をいただいたうえで実施した。

注)評価書記載事項については「事業計画の変更について」(平成 24 年 6 月)の内容である。

表 7-2(7)　植物・動物の環境保全のための措置の実施状況(鳥類)

評価書記載事項	実施状況
・周辺事業による工事などが本事業の実施中に起こった場合、その事業者と連絡を密にして、双方が同時期にオオタカの営巣地に近いところでの工事をしないよう調整を図る。	・周辺事業による工事はなかった。
・樹林を好む鳥類の生息環境を維持して行くため、アズマネザサ等の下草刈りを行い、雑木林の低木や高木となる樹種の萌芽を促すなど樹林内の階層構造を発達させ、多様な環境となるよう管理を行う。	・奥畑谷戸公園の残留緑地においては、専門家の意見を聞きながらオオタカの営巣可能な林として営巣林整備を行っている。専門家の意見により、樹林内のアズマネザサは、営巣林への人の進入を抑制し、オオタカの餌となる小鳥の生息環境となるため、刈り取りを行わないこととした(写真7-5(1)～(2)参照)。
・ヒガラ、ヤマガラ、シジュウカラなどの小型の樹林性の鳥類や、アオバズクやフクロウの大型の樹林性の鳥類の営巣場所となるよう、それぞれの生態に配慮した巣箱を設ける。	・平成25年度に奥畑谷戸公園の残留緑地内にヤマガラ、シジュウカラなどの小型の樹林性の鳥類の営巣場所となるよう、これらの生態に配慮した巣箱を15個設置した（写真7-6(1)～(2)参照)。巣箱利用状況調査では、平成30年度で4箇所、令和元年度で3箇所の巣材搬入を確認した。また、各年度でカラ類と考えられる小型鳥類が繁殖した形跡を、1箇所確認した。アオバズク、フクロウの大型の樹林性の鳥類の営巣場所となるよう、これらの生態に配慮した巣箱を平成28年6月11日に2個設置した（写真7-6(3)～(4)参照)。なお、設置にあたり、専門家の助言をいただいたうえで実施した。平成30年度の現地調査では2羽の雛を、令和元年度では、巣材、猛禽類羽毛を確認した(写真7-6(3)～(4)参照)。
・アカゲラやコゲラのようなキツツキ科の樹林性の鳥類のエサ場となるよう緑地や公園内に立ち枯れ木や伐採樹木を保存し、安全面に留意して直立した形で配置する。	・アカゲラやコゲラのようなキツツキ科の樹林性の鳥類のエサ場となるように、奥畑谷戸公園内では立ち枯れ木を保存している(写真7-5(1)～(2)参照)。奥畑谷戸公園以外の緑地や公園への保全対策については、工事の進捗に合わせ実施する。

注)評価書記載事項については「事業計画の変更について」(平成 24 年 6 月)の内容である。

表 7-2(8)　植物・動物の環境保全のための措置の実施状況(両生類)

評価書記載事項	実施状況
・トウキョウサンショウウオを含む両生類の保全対策については、過去の移植事例を参考に計画区域内においてまとまった緑の残る奥畑谷戸公園公園内に産卵のための池を作り、移植を行うこととする。	・トウキョウサンショウウオの移植については、生息地である根方谷戸川の工事前の4年（4回）間で移植を行う計画とし、池作りを含む奥畑谷戸公園整備に先駆け、奥畑谷戸公園樹林内に産卵のための仮設池を設置（平成19年度）し、平成19年度～25年度までの7年間にトウキョウサンショウウオの移植を実施した。
・移植に際しては、卵から成体になる可能性は自然界では非常に低いことから、確認した卵嚢の半数を持ち帰り、最低でも 1 ヶ月程度「トウキョウサンショウウオは生き残れるのか？」(1999 年　草野他編）に従い飼育を行い、ある程度成長した幼生を放すこととする。	・平成19年～平成23年までは根方谷戸川に産卵された卵嚢を室内に持ち帰り、「トウキョウサンショウウオは生き残れるのか？」（1999年　草野他編）に従い飼育を行い、変態直前あるいは変態後の幼生を奥畑谷戸公園の仮設池へ放した。平成24年度及び25年度は、飼育は行わず、根方谷戸川に産卵された卵嚢及び成体を直接奥畑谷戸公園内の仮設池へ移植した。平成30年4月及び令和元年5月に実施した現地調査において、奥畑谷戸公園に設置した仮設池でトウキョウサンショウウオの成体及び卵嚢を確認した。なお、仮設池に産卵した卵嚢を平成30年度では54個、令和元年度では59個を確認した(写真7-7(1)～(2)参照)。このことから、移植したトウキョウサンショウウオは、順調に成育している。
・トウキョウサンショウウオの卵を移植して、定着するまで最低 3 年程度はかかることから、工事工程を調整し、4 年（4 回）移植を行う計画とする。	・トウキョウサンショウウオの移植は4年(4回)実施することとし、平成19年より移植を開始し、奥畑谷戸公園への定着をより確実にするため、平成25年まで7年（7回）実施した。なお、平成30年4月及び令和元年度5月に実施した現地調査において、奥畑谷戸公園に設置した仮設池でトウキョウサンショウウオの成体及び卵嚢を確認した。このことから、移植したトウキョウサンショウウオは、順調に成育している。

注)評価書記載事項については「事業計画の変更について」(平成 24 年 6 月)の内容である。

表 7-2(9)　植物・動物の環境保全のための措置の実施状況(昆虫類)

評価書記載事項	実施状況
・準備工の伐開除根時に朽木を残留緑地内に持ち込むことによりコカブトムシ等の産卵生育の場所を新たに用意する。	・奥畑谷戸公園の残留緑地にエコスタック(計画区域内の伐採樹木を集積し、積み上げたもの)を設置し、昆虫類の生息環境となるようにした(写真7-8(1)～(2)参照) 。なお、エコスタックに使用した樹木は、平成26年度～平成28年度で実施したエコスタックの効果検証結果を踏まえて、前年度に伐採したものを使用した。奥畑谷戸公園に設置したエコスタックを巡回し、任意観察により昆虫類等の出現種を調査した。平成30年度では、8目17科26種を確認した。このうち、コウチュウ目は、9種でオサムシ科、デオキノコムシ科、コメツキムシ科などの生息を確認した。令和元年度では、11目32科48種の昆虫類を確認した。このうち、コウチュウ目は、13種でオサムシ科、ハネカクシ科、ゴミムシダマシ科などの生息を確認した。
・ヤマトタマムシの幼虫が育つサクラやエノキ、カシ等の衰弱木や枯死した倒木を準備工の伐開除根時に残留緑地部分に移動させることにより産卵生育の場を用意する。また、造成時に伐採したサクラ、エノキ、カシ等の一部を奥畑谷戸公園公園内に運び同様な生育環境を用意する。	・造成時に伐採したサクラ、カシ、コナラ等の一部を奥畑谷戸公園内に運び産卵成育の場を用意した(写真7-8(1)～(2)参照)。奥畑谷戸公園以外の残留緑地への保全対策については、工事の進捗に合わせ実施する。

注)評価書記載事項については「事業計画の変更について」(平成 24 年 6 月)の内容である。

表 7-3　その他の項目に係る環境保全のための措置の実施状況

評価書記載事項	実施状況
地盤沈下 ・計画区域の一部に分布する沖積粘性土層及びローム層では、盛土によって圧密沈下が生じる可能性があるため、地盤沈下対策として本事業計画の中で沈下量を考慮した盛土計画を策定する。	・沖積粘性土層及びローム層が分布する計画区域東部の谷戸では、地盤改良による盛土計画とし、地盤沈下対策として、沈下量を計測しながら盛土を段階的に施行する計画を策定した。盛土工事にあたっては、層別沈下計により沈下量を確認し、沈下が概ね収まった段階で、次段階の盛土を実施している。
温室効果ガス ・工事の施行中は、低公害型の車両を選定することはもとより、建設機械の稼働、工事用車両の走行について、現場に管理責任者を配置し、計画的・効率的な建設機械の稼働や車両の運行等の適正化に努める。 ・造成地の公園緑地、街路、造成法面等については、積極的に緑化を図る。	・工事の施行中は、低公害型の車両を採用するとともに、建設機械の稼働、工事用車両の走行については、現場に管理責任者を配置し、計画的・効率的な建設機械の稼働や車両の運行等の適正化及びアイドリングストップを徹底した。 ・造成法面は工事途中段階から、植生シート等により積極的に緑化を図った。また、工事が完了した街路には、積極的に緑化を図った(写真7-9(1)～(2)参照)。なお、公園緑地はまだ造成していない。
その他 ・工事の施行中の諸問題に対しては、計画区域に窓口を設け対処する。	・工事の施行中の諸問題に対しては、計画区域内の南山東部土地区画整理組合に窓口を設け対処した。

図 7-2　仮設、本設調整池設置位置図

写真番号①

移植種	移植地状況	活着状況
ﾀﾏﾉｶﾝｱｵｲ	 平成 30 年 5 月 8 日	 平成 30 年 5 月 8 日
エビネ	 平成 30 年 5 月 8 日	 平成 30 年 5 月 8 日
センブリ	 平成 30 年 10 月 15 日	本種は草地に生育する越年草である。平成 19 年度に奥畑谷戸公園北側の果樹園付近に整備した圃場に播種した。平成 20 年度からは、毎年日当たりの確保など生育環境の維持のために、ササや低木の伐採及び除草管理を実施するとともに、競合する高茎草本等の生育を抑えるため、人の踏圧を加えたが、現在まで確認されていない。今後も圃場については、発芽を促進するために、伐採、除草、踏圧を加える等の管理を実施する。
ヒゲシバ	 平成 30 年 10 月 15 日	本種は草地に生育する多年草である。奥畑谷戸公園北側の果樹園付近に整備した圃場に平成 19 年度に表土ごと移植をした。平成 20 年度からは、毎年日当たりなどの生育環境の維持のために、ササや低木の伐採及び除草管理を実施するとともに、競合する高茎草本等の生育を抑えるため、人の踏圧を加えた。カリマタガヤ等の草本、コナラ等の稚樹の侵入により減少し、平成 24 年度までの調査では確認されたが、平成 25 年度～平成 30 年度調査では確認されなかった。今後も圃場については、生育を促進するために、伐採、除草、踏圧を加える等の管理を実施する。

写真 7-1(1)　過年度に移植した種のモニタリング状況(平成 30 年度)

写真番号②

移植種	移植地状況	活着状況
ｳﾏﾉｽｽﾞｸｻ	 平成 30 年 8 月 7 日	 平成 30 年 8 月 7 日
ホドイモ	 平成 30 年 8 月 7 日	 平成 30 年 8 月 7 日
ﾄｳｺﾞｸｼﾀﾞ	 平成 30 年 10 月 15 日	 平成 30 年 10 月 15 日
ｵｶﾀﾂﾅﾐｿｳ	 平成 30 年 5 月 8 日	 平成 30 年 5 月 8 日

写真 7-1(2)　過年度に移植した種のモニタリング状況(平成 30 年度)

写真番号③

移植種	移植地状況	活着状況
ｻｻﾊﾞｷﾞﾝﾗﾝ	 平成 30 年 5 月 8 日	 平成 30 年 5 月 8 日
ﾎｿﾊﾞﾅﾗｲｼﾀﾞ	 平成 30 年 10 月 15 日	 平成 30 年 10 月 15 日
オシダ	 平成 30 年 10 月 15 日	本種はやや大型のシダ植物である。平成 24 年度に、造成工事個所に生育していた 1 個体を、奥畑谷戸公園内に移植した。平成 28 年度までの調査では確認されたが、平成 30 年度調査では確認されなかった。今後も確認調査を実施する。
ウラジロ	 平成 30 年 10 月 15 日	 平成 30 年 10 月 15 日

写真 7-1(3)　過年度に移植した種のモニタリング状況(平成 30 年度)

写真番号④

移植種	移植地状況	活着状況
ｱｽｶｲﾉﾃﾞ	 平成 30 年 10 月 15 日	 平成 30 年 10 月 15 日
ｻｲﾊｲﾗﾝ	 平成 30 年 5 月 8 日	 平成 30 年 5 月 8 日
キンラン	 平成 30 年 5 月 8 日	 平成 30 年 5 月 8 日

写真 7-1(4)　過年度に移植した種のモニタリング状況(平成 30 年度)

写真番号⑤

移植種	移植地状況	活着状況
ﾀﾏﾉｶﾝｱｵｲ	 令和元年 5 月 10 日	 令和元年 5 月 10 日
エビネ	 令和元年 5 月 10 日	 令和元年 5 月 10 日
センブリ	 令和元年 8 月 8 日	本種は草地に生育する越年草である。平成 19 年度に奥畑谷戸公園北側の果樹園付近に整備した圃場に播種した。平成 20 年度からは、毎年日当たりの確保など生育環境の維持のために、ササや低木の伐採及び除草管理を実施するとともに、競合する高茎草本等の生育を抑えるため、人の踏圧を加えたが、現在まで確認されていない。今後も圃場については、発芽を促進するために、伐採、除草、踏圧を加える等の管理を実施する。
ヒゲシバ	 令和元年 8 月 8 日	本種は草地に生育する多年草である。奥畑谷戸公園北側の果樹園付近に整備した圃場に平成 19 年度に表土ごと移植をした。平成 20 年度からは、毎年日当たりなどの生育環境の維持のために、ササや低木の伐採及び除草管理を実施するとともに、競合する高茎草本等の生育を抑えるため、人の踏圧を加えた。カリマタガヤ等の草本、コナラ等の稚樹の侵入により減少し、平成 24 年度までの調査では確認されたが、平成 25 年度～平成 30 年度調査では確認されなかった。今後も圃場については、生育を促進するために、伐採、除草、踏圧を加える等の管理を実施する。

写真 7-1(5)　過年度に移植した種のモニタリング状況(令和元年度)

写真番号⑥

移植種	移植地状況	活着状況
ｳﾏﾉｽｽﾞｸｻ	 令和元年 8 月 8 日	 令和元年 8 月 8 日
ホドイモ	 令和元年 8 月 8 日	 令和元年 8 月 8 日
ﾄｳｺﾞｸｼﾀﾞ	 令和元年 10 月 29 日	 令和元年 10 月 29 日
ｵｶﾀﾂﾅﾐｿｳ	 令和元年 5 月 10 日	 令和元年 5 月 10 日

写真 7-1(6)　過年度に移植した種のモニタリング状況(令和元年度)